

ホーフマンスタール改作『イエーダーマン』

Hugovon Hofmannsthal's "Jedermann" adapted from a morality play in the Middle Ages

西村 千恵子

NISHIMURA Chieko

序

『イエーダーマン』は、ホーフマンスタール（1874－1929）の作品中最も人気のある作品のひとつといわれる。というのもこの作品は、1920年第1回ザルツブルクフェスティヴァルにおいて野外劇として上演されて以来、今日まで祝祭の演目として引き継がれていることでも有名である。この作品は、中世イギリスの道徳劇『エヴリマン』をホーフマンスタールが改作したものである。彼がこの道徳劇を知ったのは、彼の友人であるクレメンス・フランケン男爵が1903年ロンドンでこの芝居を見た感動を彼に伝えたのがきっかけである。⁽¹⁾ 一度は散文形式でも試みられたが、最終的には韻文形式で1911年に完成された。その副題は、「金持ちの男が死ぬ芝居」である。

この芝居は、神の召還を受けた男が死出の旅の随行者を求めるといふ伝典まで、その話の出典を遡ることができる。⁽²⁾ 伝典の「忠実な友人の話」は、死して墓に入らんとする者にとっての忠実な友人がだれであるかについての話である。すなわちこの世において〈人間〉には3人の友人がいるとされる。死に際してまず〈人間〉を見捨てるのは、〈財産〉である。この世の中では〈財産〉は、人間の最良の友であったにもかかわらず。第2の友人である〈友人、親戚〉も墓の扉まで彼に同行するが、そこから先へ行くことを拒み、家へ引き返す。これまで〈人間〉に疎んじられてきた第3の友人〈善行〉だけが永遠の旅立ちに随伴する。この伝教寓話は、キリスト教化され中世ヨーロッパの教会で説教の題材としてしばしば取り上げられた。『エヴリマン』は、作者不詳の921行からなる芝居で、オランダの道徳劇『エルカリック』（1495年頃出版）の翻訳とされる。15世紀末から16世紀にかけて英語に訳された模様である。⁽³⁾ ドイツにおいても学者たちの手によりラテン語、ギリシャ語による同じモチーフを基本とするいくつかの作品が見られ、ハンス・ザックスは『死んで行く金持ちの男の喜劇』をものしている。

ホーフマンスタールは、改作に当たってこのハンス・ザックスの劇からも引用している。それ以外にもいくつかの先行する作品がこの改作に参考とされ借用されており、このことはホーフマンスタールの文学においては特に珍しい

ことではない。『イエーダーマン』の先にも後にもホーフマンスタールは、すでに存在するほかの作家の作品を素材としての改作を行っている。そこでホーフマンスタールは、何故そして何をどのように改作したのかということが問われることになる。『イエーダーマン』においては、1911年初版から作品に借用された出典一覧がテキストの後に付されていたが、作家自身の関与に関しては特に言及されなかったため、そのことはあまり重要とはみなされなかったようである。1912年の第7版以降には作品に序文が付されそこにはホーフマンスタール自身の、作者としての立場の表明を読むことができる。そこで作者は、この物語を「メルヘン」と呼んでいる。続いて彼は、ドイツのメルヘンについて次のように書いている。「ドイツのメルヘンには、いかなる作家もいない。それは口から口へと伝えられ、長い年月の後にはあやうく忘れられそうになったり、あるいは修正されたり付け加えられたりしてその真の姿が見失われそうになった、その時最後に2人の男がそれらを書きとめた。」⁽⁴⁾ グリム童話と『イエーダーマン』、グリム兄弟とホーフマンスタールが対置されている。最初彼はみずから「修復者」(Restaurator)として位置付けていたが、この序文では忘れられていたあるいは失われる危険にあった民衆の遺産をあらたに現代によみがえらせたグリム兄弟になぞらえたのである。1913年にはウィーンでこの劇が上演されたが、その際には作家のなしたことを評価しない批評に対して腹立ちを隠さないホーフマンスタールである。⁽⁵⁾

この小論では、中世の道徳劇『エヴリマン』とその改作『イエーダーマン』を比較しつつ、ホーフマンスタールが何を加え、何をばぶいたか、なぜこの作品を現代によみがえらせる必要があったのかを中心に考えてみたいと思う。

第1章

登場人物、および作品の構成

まずはじめに『イエーダーマン』と『エヴリマン』における登場人物、および作品の構成上の類似点と相違点について、ハンス・ザックス作『死んで行く金持ちの男の喜劇』も参照しながら概観してみたい。

中世の道徳劇と呼ばれる芝居は、中世の宗教劇の一種で

ある。〈友情〉、〈善行〉、〈信仰〉、〈知識〉、〈死〉のように人間の善と悪に関わる道徳的・倫理的抽象概念の擬人化された寓喩的人物が登場するのが、大きな特長である。そして〈人類〉、〈人間〉、〈エヴリマン〉、〈青年〉といった主人公をめぐって劇的葛藤が展開される。このように、善悪の内面的葛藤に苦しむ人間の精神的危機を劇化することによって、善の力、救済への道を説くことを目的とするものとされる。⁽⁶⁾以下道徳劇『エヴリマン』とホーフマンスタールによって改作された『イエーダーマン』における登場人物について比較し、その留意すべきところをまとめると次のようである。

- ①『エヴリマン』では〈友情〉Fellowshipであるものが、『イエーダーマン』では「よき友」Guter Gesellとなっている。ちなみにハンス・ザックスの場合には第1の友、もう一人の友となる der erst/ der ander freund。前者では人物は寓意的抽象概念であるが、後者では固有の名は持たないが不特定の人物として登場する。
- ②また、『イエーダーマン』においては、〈イエーダーマンの母〉、〈隣人〉、〈債務を払えなかった男〉など、『エヴリマン』およびハンス・ザックスには登場していない人物が幾人か配されている。執事や料理人などハンス・ザックスの作品と共通だが、『エヴリマン』にはこのような寓意的とはいえない登場人物はいない。
- ③『エヴリマン』では〈財産〉Goodsが、『イエーダーマン』では〈富〉Mammonとなる。ドイツ語で財産 Gutとせずに〈富〉Mammonと言う蔑視的ニュアンスのある語を当てている。
- ④〈善行〉においても『エヴリマン』では Good-Deeds、『イエーダーマン』では Werke、またハンス・ザックスにおいては Virtus, die Tugend となっている。英語の deed は、do と同根の語であり「行為」を意味するが、ドイツ語の Werke は、英語の work にあたる。また Tugend (Tugend) は、「徳」を意味する。ホーフマンスタールの文学を理解するに当たって Werke は、重要な語であるが、ここでは指摘するにとどめたい。
- ⑤『エヴリマン』には、〈知識〉、〈告白〉、〈美〉、〈力〉、〈分別〉、〈五感〉が登場するが、『イエーダーマン』にはそれらはなく、代わりに〈信仰〉が登場する。ハンス・ザックスの作品では、後者と同じである。
- ⑥『エヴリマン』には、悪魔は登場しないが、他の二つには登場する。

以上が登場人物において特に目立つ相違である。ホーフマンスタールが、改作に当たってハンス・ザックスから示唆を得ている点と、『エヴリマン』にもハンス・ザックスの作品にも存在しない重要な登場人物を配していることが

明瞭に読み取れよう。

次に芝居の進行あるいは構成を見ると、『エヴリマン』については、それは次のように非常に均衡が取れたものであることが指摘されている。⁽⁷⁾

1. Prolog
2. Vorspiel im Himmel
3. Death trifft Everyman
4. Geleitsuche bei irdischen Freunden
5. Hinwendung zu Good Deeds
6. Geleitsuche bei allegorischen Freunden
7. Sterbeszene
8. Nachspiel im Himmel
9. Epilog

これを参考に比較しつつ『イエーダーマン』における劇の構成を、筆者なりに考えてみた。

- ① プロローグ
- ② 天上での前芝居
- ③ イェーダーマンの最後の日
- ④ 死神の登場
- ⑤ 地上の友人たちの間での同行の求め
- ⑥ 〈善行〉の登場
- ⑦ 〈信仰〉の登場
- ⑧ 〈悪魔〉の登場
- ⑨ エピローグ

『エヴリマン』の2と3の間、即ち主人公が死と出会う前に、『イエーダーマン』の場合には〈執事〉、〈料理人〉、〈親友〉、〈隣人〉、〈負債を返済できなかった男〉、〈その妻〉、〈イエーダーマンの母〉、〈恋人〉、が次々と登場する。この日の晩宴の席上に〈死〉が登場するわけで、イエーダーマンの家の前で繰り広げられるこの場面を「イエーダーマンの最後の日」として②「天上での前芝居」と④「死神の登場」の間に置くこととした。ちなみに『エヴリマン』には場の情景あるいは設定についての記述がないが、『イエーダーマン』の場合は、主人公は家から出てきて上述の登場人物たちとつぎつぎと話を交わす。さらにテーブルが舞台上にせり上がり宴会の場面へと展開する。そこへ童子達、客たち、娘達、〈太った従弟〉、〈痩せた従弟〉が次々と登場する。晩には主人公によって催される酒宴の只中に死神が登場し、永遠の旅立ちを命じられたイエーダーマンは〈よき友〉、〈太った従弟〉、〈痩せた従弟〉、〈執事〉、〈下僕〉そして最後に〈富〉に死出の旅の同行を求める。この場面は『エヴリマン』における3から4に相当する。友人、親戚、財産の順に同行を求め拒否されるのは、両作品に共通している。エヴリマンは、この世の友人達に同行を拒否されるとすぐ〈善行〉に助けを求めるが、作品の均衡の取れた構成から

して＜善行＞の登場するこの場面は、ちょうど劇の進行のクライマックスに位置する。キリスト教の教化の立場からは、善行こそ信徒として生き、死すためのもっとも大切な課題であり、＜善行＞の登場が劇の構成の真ん中に位置することは、道徳劇の目的からしてもふさわしい事といえよう。

これに対して『イエーダーマン』ではすでに見たように、③「イエーダーマンの最後の日」が挿入されて、その均衡は変化せざるを得ない。ホーフマンスタールによって創作されたこの場面は、この中世の道徳劇を現代によみがえらせた重要な鍵を握っていると筆者は考えるものである。それと関連して＜富＞の登場は、主人公が地上の同行者を求める一連のなかに組み入れるのはふさわしくない、それほど大きな意味を持つと考えられるので、これを独立して⑥＜富＞の登場とした。本稿では、特に③「イエーダーマンの最後の日」と⑥＜富＞を中心に、ホーフマンスタール改作『イエーダーマン』を見てゆきたいと思う。

第2章

イエーダーマンの最後の日

イエーダーマン Jedermann は、英語のエヴリマン every man をドイツ語に訳したものであり、「各人」あるいは「万人」を意味するわけで、いずれにしても人間一般をあらわしている。ここで作品にそってイエーダーマンの人物とその行動を明らかにしたいと思う。第1章で指摘したように『エヴリマン』と『イエーダーマン』の大きな違いの一つは、前者においては天上での前芝居の後主人公が登場するとすぐに＜死＞が神の使者として現れるのに対し、後者においてはその間に芝居の展開がある点である。天上の前芝居と＜死＞の登場までの間のイエーダーマンと幾人かの登場人物とのやりとりにより、イエーダーマンという人物を窺い知ることができる。

最初に『エヴリマン』における＜死＞と＜万人＞の出会いを比較の対象として紹介したい。

死 そら、あそこを万人が歩いていく。
わしが来たとは露知らず、
思いはひたすら肉欲と財宝。
そのためにあいつは、天なる王、
主のおん前で、大変な苦痛に耐えねばならぬ。
万人待て。そんな派手な服装で
どこへ行く。おまえの創造主を忘れたのか。
…
死 わしは怖いものなしの死だ 一万人を
引っ捕えるんだからな…
万人 うわっ、死か、おまえが来るなんてすこしも思

っていないかった。

おまえ次第で助かる。

魚心あれば水心ではないか、私の財産をやろう—
そう壱千ポンド出す—

この一件をまたの日まで延ばしてくれたら。⁽⁸⁾

われわれは、＜死＞の口上を通して登場してきた「派手な服装をした」＜万人＞が、「肉欲と財宝」に心を奪われていることを知る。そしてまた＜万人＞は、まず手始めに＜死＞を彼の財産壱千ポンドで買収しようとする。これらの言葉によって観客は、＜万人＞が金持ちであることを了解する。

これに対して天上での神と＜死＞の対話の後登場した＜イエーダーマン＞の口上を通して伝えられる主人公の金持ち振りは、『エヴリマン』よりはるかに具体的である。彼は、町中で一番立派な、豪華な家に住み、高価な家具やたくさんの召使を持っている。たくさんのお金のほかにたくさんの田畑や広大な農園、牧場の所有者である。彼は、そこから地代や小作料の収入を得ている。彼は執事とコックに明日の宴会の準備を命じたり、＜親友＞と土地の購入に出かけようとしている。そしてこのような金持ちの男のある一日が、始まろうとしている。

実はこの日が主人公のこの世の最後の日となることは、無論彼は知らない。そしてこの最後の日、彼にとって予期せぬ登場人物たちとの出会いによって予定していたことが妨害されてしまう。その人物たちとは、＜貧しい隣人＞と＜負債でとらわれた男＞とその妻や子供たちである。これらの登場人物たちは、ホーフマンスタールの作り出した人物たちで『エヴリマン』にもハンス・ザックスの『金持ちの男の死の物語』にも登場しない。

最初に＜貧しい隣人＞が、イエーダーマンの家を訪ねてくる。この男はかつては軒を並べて主人公の隣に住んでいたが、そこを立ち退かなければならなくなった零落した人物である。隣人であったというにもかかわらず、イエーダーマンはその顔に見覚えがない。哀れみを請う＜貧しい隣人＞に主人公は銀貨一枚を施す。しかし「隣同士の誼で、応分のお恵み」を求める隣人に対して、イエーダーマンは「おれの金はおれのために働き、おれのために走りまわらなければならぬ。」と主張する。贅沢な生活の維持には、お金がかかる。富者は貧者に対して「分相応」であることを求めて言う。

＜イエーダーマン＞「… なにからなにまで金のかかることばかりだ。もっとお金が入ってきてくれなければ困るくらいだ。気安く《金持ち》などと言うがね、おれたちみたいになるとだれでも、いつもまきあげられてばかり

いてさ、ひどい目に会っているんだぜ、そんなことはお前には思いもよらないことだろうな！あっちからもこっちからも、お願いだ、なんとか助けてくれなんて連中が押しかけて来るんだ。おれたちみたいな者になるとな、ここから次の壁まで、施しをせずには、三歩と歩けないくらいなんだよ。礼儀を守り、法を守り、おのおのの分を守ってさえいたら、万事がうまくいくんだ。自分にはなにが分相応かとくと考えなくてはいかん。…」⁽⁹⁾

二人の間で「分相応」のお金の額は一致しない。かつては「軒を並べた」隣人は、主人公と同じ側、金持ちに属する人間であった。かつての隣人は、かつての身分を回復するための「分相応」を求めるが、イエーダーマンは、金持ちの立場と、金持ちが負わされている義務や負担を主張し貧しい隣人に、一枚の銀貨が「分相応」であることを述べたてている。金持ちと貧しいものという金銭によって判断された「分相応」の論理に屈して弱者は銀貨一枚を持ってすごすと退場する。

次に「負債でとらわれた男」が刑吏とともに登場する。その妻と子供たちもほろをまといつづいて現われる。イエーダーマンは、まず彼自身が債権者としてこの男の運命に関与しているという事実を認識していない。

〈イエーダーマン〉「おれはおまえを知らんぞ。見たこともない。」

〈負債で捕らわれた男〉「だがおれを踏みつけているのはあんたの足だ。」

〈イエーダーマン〉「それはおかしいじゃないか、このおれが何も知らないのに、そんなことをするなんて。」⁽¹⁰⁾

債権者であるとされるイエーダーマンは、この件について自分自身は関知していないのだから責任はないと主張する。これに対して男は、直接に手を下すのは主人公の「手下の手下」であり、イエーダーマンは「陰で糸を引く黒幕」なのだと言及する。これに対するイエーダーマンの反ばくは、無差別な貨幣の支配をとらえていて興味深い。

〈イエーダーマン〉「利息を払わなきゃならん金を、誰がおまえに借りてくれといった？おまえは当然の報いを受けてるんだぜ。金にとっちゃおれもおまえもないんだ。人の顔を見て差別するなんてことは金はしないよ。期限が切れ、期日が過ぎただけだ。」⁽¹¹⁾

また債務証書を反故にしてほしいと哀願するこの男の〈妻〉に対しては、さらに次のように言う。

〈イエーダーマン〉「... こりゃ別に悪意があって、こう

なってるんじゃないんだよ... 金だってほかの品物と同じさ、契約とか法律ってのは、はっきりしたもんなんだよ。」⁽¹²⁾

金銭をめぐる富者と貧者がここで鋭く対立を見せている。

〈負債で捕らわれた男〉「金はほかの品物と同じじゃねえ。金はのろわれた魔物だ。だれだって金に手を伸ばしたやつは、魂が病み、けがれてしまい、もう二度となおらないんだ。悪魔がこの世に張り巡らした捕獲網こそ、ほかでもない金という名なんだ。」⁽¹³⁾

負債を抱え破滅の憂き目にある立場から金という「魔物」を排撃する男の呪いの言葉に対して、イエーダーマンは、金の利点、金の力、金の絶対的な威力を擁護して誇らかに主張している。

〈イエーダーマン〉「必要なものを捜し回ったり、物々交換するといった下等なやり方の代わりに、金というものを考え出してくれたのは、こりゃ頭のいい、えらい男だ。そのおかげでこの世全体の様子がぐんと程度の高いものになったし、金を持っていれば、どんな人間でも、まあ、ちょっとした神様みたいな力をもてるようになった。とにかく、金の力を利用すれば、なんでもつくれるし、なんでもやっつけられるんだからな。何でも自分のものにできるし、いちいちうるさく監視したり、大声で怒鳴ったりしなくても、何千という人間を思うように動かせるんだ。金で買えないほど高貴なものもなけりゃ、堅固なものもありゃしない。おまえだって金さえあれば土地が買えるんだ、小作人までひっくるめてな。そうさ、皇帝陛下が既得権をお持ちの土地さ...、そういう土地だって、金さえ出せば、いつだって、適当な部分を買えるんだ。金に勝る力なんておれは知らんね。この力の前じゃだれだって身を低くしないわけにはいかん。…」⁽¹⁴⁾

イエーダーマンの主張は、貨幣万能の世界であり、皇帝陛下の既得権もなし崩しとなる社会、まさしく資本主義の時代を代弁するものといえよう。金持ちの主人公は、この時代の勝利者であり、敗者である貧しい者を上述の論理でねじ伏せるのである。しかしホーフマンスタールは、すでに引用したようにお金の本質を負った男の口を借りて述べている。すなわちお金は、「悪魔がこの世に張り巡らした捕獲網」である。金持ちと貧しいものは、お互いにかかわりのない別の世界に住んでいるのではなく、互いにお金をめぐって絡まりあっているのである。

しかし主人公は、自分自身が生き関与している世界のこの本質への理解や認識を欠いている。それ故、その本質から生じる現実と直面した時、不快感をもち心をかき乱されるのである。

＜イエーダーマン＞（親友に向かって）「悪いけど跡をつけて行って、そっと様子を見てきてくれないか。亭主の方が牢屋に入るのは、こりゃ仕方がないだろうが、かみさんのほうには、どこかに住むところを見つけてやって、子供たちともども、生きていくに必要なものは、僕がくれてやろうと思うんだ。… 連中の苦労や嘆きなんか見たくも聞きたくもない。まったく不愉快な話だ。心になんのやましいところもなく、一人落ち着いた気持ちで暮らしているのに、突然、それもこっちがとても楽しい気分有的时候に、わけもわからんうちにけんかを吹っかけられ、不平をを聞かされ、不愉快にさせられる。落ち着いた気分なんか吹っ飛ばされてしまうんだ。ねえ、きみ、こんな気持ちになるのはどうしてだ。あいつの暮らしがおれとどう関係があるんだ？」⁽¹⁵⁾

イエーダーマンは、負債を負った男の牢屋行きは当然とみなすが、その妻子には憐みを覚え、鷹揚な金持ちにふさわしい行為をする。この不愉快な事件の片をつけて彼の関心は、恋人の誕生祝に送る別荘の建物や庭のプランに即座に移っていく。「あいつの暮らしがおれとどう関係があるか」という問いもほんの瞬時の迷いごとに過ぎない。

しかしホーフマンスタールは、すべてを絡めとる網にお金の本質を見ている。「何らかの形で金持ちはみな貧しい者の債権者であり、貧乏人につらい仕事を命じる支配者」とみなしている。「金持ちは、指一本動かしてはいないつもりで、昼に夜に幾百人をつらい勤めへと遣わせる。毎日朝あけやらぬ前に彼らは（＝貧乏人たち）は、彼（金持ち）のために起床し、森の中や真つ暗な山の穴の中へ下りていかねばならない。あるいは彼らの釣り船を冷たい海へ押し出さなければならない。彼が、彼らを知らないというのは、彼の傲慢である。」⁽¹⁶⁾と、断じている。そしてここに彼の時代の富者と貧者の関係の特性をみているのである。彼は続けて述べている。「この点において彼（金持ち）は、古代の奴隷所有者とは異なっている。」近代社会においては、支配と被支配の関係は、古代におけるように直接的なものではなくなっており、金銭を媒介して目に見えにくい形となってしまった。しかしそれは厳然として存在しており、中世と比べて人間の生活に貨幣が及ぼす影響ははかりしれなく広がっており、万人にかかわるものとなっているがゆえに、ホーフマンスタールは、われわれの時代のイエーダーマンを登場させたのである。

次に登場するのは＜イエーダーマンの母＞である。忙しい主人公は、母との出会いを内心喜んでいないが、その場から逃げるには主人公はあまりに「堂々とした」、育ちのよい人物である。

＜イエーダーマンの母＞「息子や、おまえに会えてうれしいよ。世間的ないろいろな仕事のために、おまえは私と会っている時間が少ししかないのが、わたしはとても悲しいのだよ。」

＜イエーダーマン＞「夜風は体にさわりますよ。あまり丈夫ではないのですし、こんなところにいらっしやるのは、心配で見ておられません。家にお入りになりませんか？」

＜イエーダーマンの母＞「それじゃおまえもいっしょに行って家にいてくれるのかい？」

＜イエーダーマン＞「それがどうも、今晚はそうはいかないのです。」

＜イエーダーマンの母＞「それじゃ、こうして道端でお前と話しても、いやな顔をするんじゃないよ。」

＜イエーダーマン＞「ただ、あなたのお体がとても心配なんです。いかがでしょう、また別なときに——。」⁽¹⁷⁾

この場面には、この世のことに、何よりも金をもうけることに心を奪われている「多忙な」主人公と息子を思う母の願いの深刻な対立があらわれている。息子の身を心配する敬虔な母は、「永遠の救済」についてたずねる。「魂が、主なる神様に向けられているかどうか」が、母を通じて問われるが、イエーダーマンは関心を示さない。というよりむしろ彼の言葉からは、宗教的な問いに対しては反感に近い感情が表明される。イエーダーマンは、宗教心を失った現代人の代表であり、古い世代を代表する母との間には深い隔たりがあるゆえに、母の問いかげは息子の心に届かないのである。

＜イエーダーマン＞「お母さん、ばかにするなんて、とんでもありません…。ただ僕の気に入らないのは、連中が、老人や病人たちの頭に暗い考えしか吹き込まないことです。」

＜イエーダーマンの母＞「暗いとお言いが、本当に暗いのはこの浮世のほうで、死ぬことを考えるのは明るい心楽しいことなんだよ。」⁽¹⁸⁾

以上の展開から、金持ちのイエーダーマン、貧しい人を搾取するイエーダーマン、貨幣が絶対的力で支配する社会を擁護するイエーダーマン、世事に多忙なイエーダーマン、宗教心の欠如したイエーダーマン像が浮かぶ。すなわちイエーダーマンとは、貨幣経済があまねく浸透した近代資

本主義社会に生きる人間たち、その利益を享受することにより他者を踏みにじっているのだが、そのことに思い至らない傲慢で愚かな人々を代表する人物と言えよう。

第3章

〈富〉の登場

母の去った後〈恋人〉が現れ、やがて〈イエーダーマン〉の催す宴が始まる。この世での享乐的なひと時を象徴している宴会の真っ最中に神の死者として〈死〉が登場するという趣向は、人生のはかなさ、いつどこにおいても人間は死すべき運命を免れない存在であることを、この舞台を見ているものに鮮明に印象付けるであろう。ちなみに主人公の年齢は「40歳になるかならぬか」であること、生の真っ只中にあり、死はまだ先のこととして現世を享受することに忙しい人物であることは、これに先立つ母との会話の中で明らかとなっている。

〈親友〉、〈恋人〉、〈太った従弟〉、〈痩せた従弟〉やその他の招かれた客たちが楽しそうに振舞っている中、すでに主人公の周囲には死の気配が忍び寄っている。他の人に聞こえない鐘の音や、「イエーダーマン!」と繰り返し呼ぶ恐ろしい声が響きわたって、締め付けるような不安が彼を襲い、宴を楽しもうとするのにこれでもできず意識とは違ったことを口走ってしまうのである。すでに彼は生と死の間にあるとあってよく、これまでとは世界が違って見え始めているのである。ついに〈死〉があらわれ、一刻の猶予もなく旅立たねばならにことを告げる。「いつだって社交仲間と一緒」で一人でいたことがないイエーダーマンは、神の裁きの前にどうしても一人で立つことを拒み、道連れを探すほんのひとときの猶予を懇願する。最初は〈親友〉に、ついで二人の従弟に依頼するが断られ、死神が近づくと下僕たちも逃げ出す。この世の友人達に裏切られたイエーダーマンは、「完全に見捨てられた」ことを嘆きつつも、これまで成功を与えてくれたお金の力に頼ろうとする。

そこでついに〈富〉が、登場することとなる。「長持ちの蓋がパタンと開いて、富が体を起こす。大きな男である」と、ト書きには記されている。主人公に対する態度は、横柄に至極乱暴である。『エヴリマン』における〈財産〉と比べると、その印象は更に強く感じられる。それは、この時代において巨大化した貨幣の世界に対する支配力を象徴的に示しているものである。それと同時にイエーダーマンより図体が大きいこの〈富〉は、イエーダーマンとの力関係において勝ることを如実に物語っている。

〈イエーダーマン〉「おまえはいつたいたれだ!」

〈富〉「なんだおれの顔も知らんのか? そのくせおれをいっしょに引っ張っていく気なのか? おまえの富だよ、おれは。おまえの金だ。この世でおまえが持っている唯一無二のものだ。」

〈イエーダーマン〉(富を見つめて)「おまえの顔つきは、あんまりいいものとは思えない。おまえの顔を見ても、心から喜ばしい気持ちにはとてもなれん...」⁽¹⁹⁾

長持ちから現れた〈富〉を見てのイエーダーマンの台詞は、彼がこれまで〈富〉の正体をよくは知らなかったことを物語っている。〈富〉は、この世では絶大な力をイエーダーマンに与えることができるが、あの世に行くイエーダーマンにはすぐにも別れを告げる。

〈イエーダーマン〉「おまえもいっしょに行くんだ、そういうことなんだ。」

〈富〉「いや、一步も動かんよ、おれはここのほうが気持ちが良いからな。」

〈イエーダーマン〉「おまえはおれのものだぞ。おれの持ち物でありおれの金じゃないか。」

〈富〉「おまえの持ち物だと、はは、笑わせるなよ。」

〈富〉「どうやらおれたちの立場は逆のようだな。みる、おれはこんなにでかいが、おまえなんか、小人みたいに小さいじゃないか。」

〈イエーダーマン〉「おれはおまえを意のままにつかてきたぞ。」

〈富〉「そしておれはおまえの魂を支配してたんだ。」⁽²⁰⁾

ここでイエーダーマンと〈富〉の関係が、実は逆のものであったことが明らかにされている。すなわち金を支配していたつもりが、反対に金の力によって意のままに操られていたに過ぎなかったのである。これまで従者を演じていた〈富〉は、ここでその仮面を外し、彼の真の顔を見せるのである。

〈富〉「イエーダーマン。いいか、おれはここに残る。で、おまえはどこに残る? おまえが元気に動き回っていたのは、おれがおまえに吹き込んでやったもののおかげだ。華やかさや名声、見栄、高慢、それに呪われた色狂い。そりゃみんな、おれがこいつに吹き込んでやったものだ。そしてこの期におよんでもまだ、こいつが地面にもぶっ倒れず、威張りかえって、頭を上げていられるのは、ただ、自分の金や財産にささえられてのことにすぎない。おまえの生気の源はみんなほれ、ここにある...。だがほら、また長持ちの中に落ちていく、そして、これでお

まえのしあわせもおしまいだ。もうすぐおまえの感覚はなくなってしまうだろう。二度とおれを見ることはあるまい。おれはこの世にいる間だけ、おまえに預けられていただけだ。おまえがこれから行くところに、一緒についてなんか行きやしない、行くもんか。…。おまえはおふくろの腹から生まれたときと同じように、丸裸で墓の中にはいるのさ。」⁽²¹⁾

台本で読む限りにおいては、われわれは語られる言葉とト書きに記されている説明を通じて作品を理解するわけであるが、作家自身がこの〈富〉をどのようにあらわそうとしたかを知ることは大変興味深いものである。1912年に発表されたエッセイの中には、次のように記されている。「その姿は小人でありそして巨人でもある。半裸で、腕には金のリング、首には真珠の紐、金色のはちきれそうな指には灰色がかった長い鉤爪。」その声もぞっとするものである。「あるときは女かあるいは去勢された男のようなく裏声で、あるときは荒々しい脅かす響きがかめられている。」⁽²²⁾ ホーフマンスタールは、この〈富〉の姿に人間の運命を決定する得体の知れない力を有する金の本質を託したのである。

お金については近代社会以前から、中世のキリスト教社会にあっても穢れたものとして扱われてきたことはよく知られている。道徳劇『エヴリマン』においては、あの世への同行を〈財産〉に断られた〈万人〉が嘆くのに応えて財産が言う。

財産 おや、おや、私があなたのものだと思いで。
万人 そう思っていた。
財産 いえ、万人、それはちがいます。
しばらくの間あなたにかしあたえられていただけ。
景気のない一時期、私を所有しておられただけ。
私の本性は人間の靈魂を殺すこと。
たとえ一人を救うことがあっても、千人は滅ぼします。⁽²³⁾

〈財産〉は、〈万人〉の悲憤を見て嬉々として去る。〈財産〉はこの地上でのみ〈万人〉に仕えるのであって神の召還を受けた〈万人〉とはもはや無縁の存在であること、所有していたと思っていたのは間違いで、ただ一時的に〈万人〉に預けられていたのものであるという点は、両作品とも共通している。しかし無論『エヴリマン』には、お金の本質を人間の社会的関係の中に捉える視点はない。中世の道徳劇の主人公は、「誘惑に屈しやすい反面、改心

を頑なに拒むこともなく、最終的には跪いて神に許しを乞う。言い換えれば、彼らは死後まっすぐに天国へ行けるほどの聖人でも善人でもないが、しかし全く救済の可能性なく地獄へ落とされる悪人でもない。」⁽²⁴⁾ といわれる。このキリスト教徒の大半をしめる人々の運命は、中世を通じての重大な関心事であり、『エヴリマン』は、そのような人間の今わの際の改悔による往生を描いているものである。道徳劇の研究者に拠ると、ここでの万人の死は、「理想の往生」に他ならないという。すなわち、「主人公に示される償いの方法も、当時の現実的なキリスト教を背景とした具体的なものである。告解の秘蹟を受けた〈万人〉は、現世での財産に関して遺言を用意する。まず財産の半分を正当なる所有者に返却することにより、現世的な正義を尊重し、自分の改悔が有効となるための最低条件を満たす。残りの半分は貧者に施すが、貧者への施しは「七つの慈善行為」の一つに他ならない。この慈愛に基づく他者への行為が、そのままキリストへの慈善行為であり、またキリスト自身が最後の審判で語るように、まさにそれを果した者が天国に迎えられるのである。劇の最後で、〈万人〉は決算書を〈善行〉に持たせてみまがるが、これは汚点もなく未払い部分もない決算書である。」というわけである。⁽²⁵⁾

『イエーダーマン』においても、主人公は〈善行〉と〈信仰〉の助けによって天国への往生を果たすが、この作品は、中世キリスト教の道徳劇のような天国への指南書と同じ目的で書かれたものではないことは言うまでもない。現代人イエーダーマンは、最初自分自身の〈善行〉の呼びかけに応じようとしなない。しかし病んだ女の姿でベッドに伏す〈善行〉のまなざしに、「これまで経験したことのないやさしさ」を感じ、そのまなざしのもとで「燃えるように強い後悔の念」に襲われる。さらに〈信仰〉の力を借りて、子供の頃の信仰の言葉を思い出す。深い後悔による魂の更新、真の魂の信仰によってイエーダーマンは、救済されることとなる。そこへ〈悪魔〉が登場して、このイエーダーマンの救済に異議を唱える。

〈悪魔〉「いつからでえ？どこからでえ？どんなふうにしてそうなるんだよ？あつという間にそんなことになっちゃうのかよ？いいか、ある男が一生の間、おおいに活発に動きまわって、おれたち向きばかりのことばかりやっつてのけたとすらあな、それもだ、実に用心深く、念には念を入れて、毎日毎晩、ひとつひとつ石を積み上げるようにして着実におれたちのものとなってきたとするぞ、そういう堅忍不拔の男がだ、瞬きひとつする間に、まったく別のものになっちゃうのかよ？ちょっと合図をするだけで、おまえたちはこいつを変えちゃうのかい？」⁽²⁶⁾

『エヴリマン』には登場しないこの〈悪魔〉は、オーストリアの民衆劇に登場する道化役ハンス・ヴェルストにつながるものである。〈悪魔〉は、イエーダーマン獲得に失敗して罪深いイエーダーマンが、死の間に救われることに不満をぶちまける。しかし〈善行〉と〈信仰〉に行く手を阻止され、〈天使〉の姿を見て退散する。最後にイエーダーマンは、元気を取り戻した〈善行〉を唯一の同行者として墓へと赴き、信仰がイエーダーマンが人間の命を全うしたことを告げて幕となるのである。

キリスト教の衣装をまとった中世の道德劇にホフマンスタールが盛り込んだ内容は、意外なほどに現代的な、社会的テーマであった。こうして中世の〈万人〉の「理想的な死出の旅支度」、キリスト教としての信仰のあり方を教

え諭すことを目的とした道德劇は、「物質主義と相対主義によって解体した」⁽²⁷⁾ 困難な状況に生きるわれわれへの警世の劇としてよみがえったのである。貨幣の網がいよいよ緊密に張り巡らされる時代にあつて、いかにして現世的な正義は実現できるのだろうか。人間の真の救いとはいかなることであり、且つ又それは可能であろうかと、現代の民衆劇は問いかけているのではないだろうか。

本稿は、2000年度金沢経済大学、海外研修制度による、オーストリア・ウィーン大学での在外研究の成果報告でもあります。この制度により海外での研究の機会を与えて下さったことに、あらためて感謝申し上げます。

【引用】

- (1) Hofmannsthal SAEMTLICHE WERKE KRITISCHE AUSGABE BAND IX Dramen7 (以下SW IX Xと表記) S.99
- (2) SW IX S.108 Drei Feunde (J. G. Herderによる)
- (3) 『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』松田隆美他著 p.199
- (4) Das alte Spiel von Jedermann (HUGO VON HOFMANNSTHAL GESAMMELTE WERKE IN EINZELAUSGABEN PROSA III) S.114 (以下PROSA IIIと表記する) / SW IX S.33
- (5) SW IX S.275
- (6) 集英社 世界文学大事典 5 p.567
- (7) SW IX S.109
- (8) 『イギリス道德劇集』鳥居忠信, 山田耕士, 磯野守彦共訳 p.554-p.556
- (9) SW IX S.40 / ホフマンスタール『イエーダーマン』津川良太訳 (筑摩世界文学大系 63) (以下『イエーダーマン』と表記する) p.107
- (10) SW IX S.41-42 / 『イエーダーマン』 p.107
- (11) SW IX S.44 / 『イエーダーマン』 p.108
- (12) SW IX S.44 / 『イエーダーマン』 p.108
- (13) SW IX S.44 / 『イエーダーマン』 p.108
- (14) SW IX S.45 / 『イエーダーマン』 p.108-109
- (15) SW IX S.44 / 『イエーダーマン』 p.109
- (16) Prosa III S.124
- (17) SW IX S.47-48 / 『イエーダーマン』 p.110
- (18) SW IX S.48-49 / 『イエーダーマン』 p.111
- (19) SW IX S.78 / 『イエーダーマン』 p.124
- (20) SW IX S.78-79 / 『イエーダーマン』 p.124
- (21) SW IX S.79-80 / 『イエーダーマン』 p.125
- (22) PROSA III S.130
- (23) 『イギリス道德劇集』 p.573
- (24) 『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』 p.104
- (25) 『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』 p.111
- (26) SW IX S.92 / 『イエーダーマン』 p.131
- (27) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』E.R.クルツイウス著 p.20

【文献】

- Jedermann (Hofmannsthal SAEMTLICHE WERKE KRITISCHE AUSGABE BAND IX Dramen7) S.Fischer Verlag 1990
- Jedermann (HUGO VON HOFMANNSTHAL GESAMMELTE WERKE IN EINZELAUSGABEN DRAMEN III) S.Fischer Verlag 1969
- Hugo von Hofmannsthal Jedermann Das Spiel vom Sterben des reichen Mannes
Fischer Taschenbuch Verlag 1988
- Hugo v. Hofmannsthal Jedermann Das Spiel vom Sterben des reichen Mannes Hrausgegeben von Thomasberger Philipp Reclam jun. Stuttgart 2000
- Das alte Spiel von Jedermann (HUGO VON HOFMANNSTHAL GESAMMELTE WERKE IN EINZELAUSGABEN PROSA III) S.Fischer Verlag 1964
- ホフマンスタール『イエーダーマン』津川良太訳 (筑摩世界文学大系 63) 筑摩書房 1974年
- 『ホフマンスタール』(ロロモノグラフィ叢書) ヴェルナー・フォルケ著 横山滋訳 理想社 1971年
- 『イギリス道德劇集』鳥居忠信, 山田耕士, 磯野守彦共訳 リーベル出版 1991年
- 『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』松田隆美他著 慶應義塾大学出版会株式会社 1998年
- 『ヨーロッパ文学とラテン中世』E.R.クルツイウス著 南大路 振一, 岸本通夫, 中村善也訳 みすず書房 1971年
- 『バロック時代のドイツ演劇』永野藤夫著 東洋出版社 1974年
- 『ブリューゲル民衆劇場の画家』W・S・ギブソン著 森洋子, 小池寿子訳 美術公論社 1992年
- 『大世界劇場 宮廷祝宴の時代』(叢書 ユニベルシタス 164) アレヴィン・ゼルツレ著 円子修平訳 法政大学出版
- 『アレゴリーの織物』川村二郎著 講談社 1991年
- 『バロック演劇名作集』カルデロン他著 岩根國和, 佐竹謙一 訳 株式会社国書刊行会 1994年
- 『ホフマンスタール論考』武居忠通著 日本図書刊行会 2002年
- 『音楽祭の社会史 ザルツブルクフェスティヴァル』(叢書 ユニベルシタス) S・ギャラップ著 城戸他訳 法政大学出版
- 『貨幣の哲学』ゲオルク・ジンメル著 居安 正著 白水社 1999年